

仕事と私事で使い分ける



石崎裕也

立教大学理学部化学科
[171-8501] 豊島区西池袋3-34-1
助教, 博士(工学).
専門は高分子材料, 表界面科学.
<https://www2.rikkyo.ac.jp/web/naganolab/index-j.html>

高分子学会のダイバーシティ懇談会に何度かお邪魔させていただいたところ、「先輩からのメッセージ —仕事と私事—」の執筆依頼をいただき、正直少し困った。博士の学位をとってまだ5年、深い人生経験があるわけでもなく、何を書こうか迷った。ただ、ちょうど次の大学に任期なしのポジションが決まったタイミングでもあり、この機会にこれまでの自分の「仕事」と「私事」を少し振り返ってみることにした。

大学の研究者という仕事は、なかなか落ち着かない職業だと思う。多くの場合、若手研究者のポジションは任期付きで、数年ごとに次の職場を探す。狙った場所でポジションを得るには実力だけでなく運も必要だと思う。私の場合、大学(?)が高知高専、大学院が東北大学、現職が立教大学、そして来年度からは助教として中部地方へ移る予定であり、地図で見ると日本をわりと素直に縦断している。

博士課程のころは、いわゆる「月月火火水木金」で研究をしていた。幸い妻も別の研究室ではあるが博士課程の同級生であったため、この生活スタイルについて特に衝突はなかった。むしろお互い「そんなものだよ」という感覚だった。博士課程修了後、妻は民間企業へ就職し愛媛へ、私は大学でのポジションが決まらず東北大学で1年ポスドクをすることになった。その翌年、現職の立教大学でのポジションが決まったタイミングで結婚し、関東で一緒に暮らすことになった。

結婚して生活を共にするようになると、いろいろなことが変わる。中でも印象的だったのが、苗字のことと生活スタイルである。まず苗字について。日本では結婚すると女性が姓を変えることがまだ多いように思う。実際、内閣府の男女共同参画局のデータ¹⁾を見てみると、2024年時点で約94%の女性が苗字を変更しているらしい。私たちの場合、妻側の苗字を名乗ることにした。男性側が苗字を変えると、なぜか面白いことも起きる。よく聞かれるのは「婿入りしたんですか?」と。現在の日本の制度は個人を単位とした家族制度なので、結婚しただけで「婿に入る」「嫁に行く」というのはおかしな話である。それでもそういう言葉が自然に出てくるところに、日本の文化や慣習が残っているのだなと感じる。一方、研究者としては少ないながら旧姓で論文

や学会発表を行ってきたこともあり、完全に苗字を変えるのも少しややこしい。そのため、「仕事」では「石崎」、「私事」では「別役」を名乗り、苗字を使い分けている。最近は大学や企業にかかわらず旧姓使用などの制度が整備されてきており、こうした柔軟な選択ができるようになってきたのはありがたい。

もう一つ大きく変わったのが生活スタイルである。結婚して一緒に暮らすため、妻が千葉の研究所へ異動してくれた。どこに住むかは意外と難しく、お互いの通勤や生活のバランスを考えて決めた。最終的には妻の会社の社宅に住むことになり、私の通勤時間は片道約2時間、往復4時間になった。朝の満員電車はなかなか大変である(決して文句を言っているわけではない、たぶん)。最初の1カ月はしんどかったが、慣れてくるとそれほど苦ではない。通勤時間の分、実験できる時間は少し減ったが、悪いことばかりでもない。電車の中でメールを確認したり、研究のアイデアを考えたりする時間が意外と増えた。ただ、平日の家事はほとんど妻に任せきりで、申し訳ない気持ちがある。せっかく一緒に住んでいても平日に過ごす時間はそれほど多くないので、たまには少し早く帰ることにしている。言い方は少し良くないが、いわば「ポイント稼ぎ」である。池袋駅のC3出口の近くには週替わりのスイーツ専門店があり、帰り道についお土産を買ってしまう。下心が見え見えな気もするが、今のところそれなりに効果はあるようだ。

こうした生活をしていると、諸先輩方はどうしているのだろうと気になる。ただ、おそらく特別な正解があるわけではなく、それぞれの状況に合わせてバランスを取っているのだろう。大学に限らず、研究者という仕事は「仕事」と「私事」の境界が少し曖昧な職業だと思う。その時々状況に合わせて選択しながら、これからも「仕事」も「私事」もどちらも大切にしていきたいと思っている。

文 献

- 1) 内閣府男女共同参画局, “夫婦の姓(名字・氏)に関するデータ”, 閲覧日: 2026/03/14